

## 少女の死

昨年秋深い十月の末、東京を遠く離れた上越の町に、わたしは二週間ほど滞在した。美しい自然だった。滞在中、宿の近くに住む一人の少女と親しくなった。その十二歳の少女は、胸を病んで療養の日々を送っていた。ふさふさしたおかつぱ髪が、いつもきれいに梳いてあった。

雪のように白い肌。臉と顔と唇のすきとおるような紅色。つぶらな瞳がいつもうるんでいて、空のどこかに自分の運命を読みとろうとでもするのように、いつも上の方をみつめるくせをもっていた。笑うとひととき美しく輝いた。その笑顔をみたいわたしは、会いたんび心ゆくまで少女を笑わせた。

わたしが東京へ戻るとき、少女はわたしを送ってきてくれた。いくら冗談をとばしても少女は余り笑わなかった。モスリンのような清楚な着物にほっそり身を包み、道々の野花をつみながら、黙ってわたしについてきた。

大分離れてから振り返ったとき、少女は袂をくわえてこつちを見ていたが、やがて身をひるがえしてすばや丘のかげに消えてしまった。

少女はきのう他界した。

(一九五四・一一)